

編集後記

中村学園大学 流通科学部

近江 貴治

「OKY」、この言葉が聞かれるようになって久しい。日本で日常を送っていると耳にすることはないが、日系企業の海外駐在員の間では、かなり広まっているものである。OKYは、「お前、来て、やってみろ」の省略で、何やら人気タレント張りの安直な言葉のようにも聞こえるが、駐在員同士では極めて真顔で語られている。

「お前」の指すところは、日本本社の役員・社員。つまり、日本の流儀であれやこれや指示を出してきて、そのとおりにいかないと現地の事情を省みずに「何でそれくらいできないんだ！」と怒る。現地から言いたくなるのは「OKY！」である。

筆者の知る駐在員の中には、新卒で入社して以来ずっと国内勤務だったのが、40歳過ぎて初めて海外赴任を言い渡され、行ったらなんと日本人は自分ひとりの現場だった、という方もいる。英語能力も不十分だったが、幸いに現地スタッフが協力的で何とかやってこられたよ、と語る苦労は推し量るに余りある。筆者も前職では出張で度々東南アジアを訪れていたが、海外現地法人が成り立っているのは、駐在員と現地人のスタッフが融和して業務遂行しているからに他ならず、そこでは日本本社の影は極めて薄い。本社なぞ当てにならない、兎にも角にも徒手空拳でやっていくしかない、と言うのが駐在員たちの実情だろう。

近年では、地方の中小企業でもアジア方面に進出する機会が増えている。縮小の一途をたどる日本市場を相手にしては、経営も縮小せざるを得ない。成長する地域で事業展開を図るのは、企業として当然の選択であろう。学生には、どこに就職してもいつ海外赴任を言い渡されるか分からないし、どこにでも海外で活躍できるチャンスはある、と常々言っているが、その先に「OKY！」と言いたくなるような苦労が待っていることは、どれだけ伝えられているだろうか。海外勤務あるいは海外出張が多い仕事というと、華やかなビジネスパーソンをイメージする学生もいるが、マレーシアに20回ほど、その他の国を合わせると30回以上海外出張し、現地のプロジェクトを手がけた筆者の経験からは、少なくとも国内業務以上に泥臭く仕事していかなければ務まるものではないと言える。

昨今、修学旅行で海外へ行く高校も少なくない。若いうちに少しでも外国の空気を感じることは、貴重な経験となろう。大学生にしてもしかり。旅行でもいいから異国に触れてほしいと思う。しかし、海外で働くことがどういうことか、刹那を過ごすだけでは理解できない。筆者も度々現地を訪問し、駐在員の世話にならずに直接現地スタッフと丁々発止で議論し、彼らの人間関係を取り持つようなことまでしてはじめて、おぼろげながらにその現地法人の全体像が見えたような気がした。

大学4年間で、どこまで学生に伝えることができるだろうか。いや、そもそも自分自身が海外で働くことを理解できているのだろうか、本学着任以来自問する日々が続いている。ただひとつ学生に望むのは、「OKY！」の言葉を向けられる人間にならないことである。